原采蘋の詩に見る時間意識

――その表現と特質――

柯　明

はじめに

原采蘋（一七九八―一八五九）、名は猷、号は采蘋、別号は霞窓。九州筑前の秋月藩に仕える儒者・原古処（一七六七―一八二七）の長女として生まれた。采蘋は幼年より父から漢詩文の教育を受け、唐詩をよく学んだ。父の言いつけ「不許無名入故城」[1]（名無くして故城に入るを許さず）を実現するため、当時では極めて珍しく、一生を通して旅を続け、漢詩を作りながら「千里独行」[2]の放浪生涯を送った。同時代の女性漢詩人と比べると、その行動範囲は極めて広い。

しかし、従来は彼女の伝記に関する研究、もしくは九州の郷土詩人としての研究が行われてきたが、その詩文に関する具体的な研究はほとんど見られない。本稿では、文学的な視点から采蘋が作った漢詩そのものに着目し、詩に多く現れた時間表現を取り上げることによって、なぜ彼女が時間表現を愛用したのか、彼女が時間をどのように意識し、どのように表現していたかについて明らかにしたい。

第一節　采蘋の詩における時間の諸相

原采蘋は生涯を通して旅を続け、日本各地を遍歴した。まさに「旅の詩人」と言えよう。彼女の遊歴生活は主に四つの段階に分けられる（資料一：略歴）。

采蘋の詩には、遊歴生活・時間の経過について語る表現が多く、中でも特に「十年」「十八年」「十餘歳」など、明確に時間の長さ・年数または年齢・季節・時刻を示す時間名詞が約一七〇ヶ所に見え、全詩篇[3]のうち、大きな比重を占めている。これは同時代の詩人の中においては、非常に特徴的なことである。

遥か古い時代から、時間は人々の感慨を誘うテーマとして文学に詠み込まれてきた。古人の時間に関する思考の軌跡は、漢詩にも数

資料一：略歴

遊　歴	滞在地	事　　件
15歳～26歳 **父母と同遊** 文化九年～ 文政六年 （1812-1823）	九州や中国地方	・秋月（15歳）：父・古処が政変に巻き込まれ、職を解かれる。 ・甘木（20歳）：「天城詩社」に入り、父の代講を務める。 ・日田（23歳）：父に同行。広瀬淡窓を訪ね、咸宜園の子弟と唱和。 ・長崎（26歳）：父に同行。漢詩の才能が認められ、江戸行きを決心。
28－29歳 **一回目の旅** 文政八、九年 （1825-1826）	江戸を目指して故郷を出たが、京都に滞在後帰郷	・出発：父から「不許無名入故城」の餞別詩 ・福岡（28歳）：友人の亀井少栞に別れを告ぐ ・福山：父の旧友菅茶山を訪ねる ・京都：六月、頼山陽等と会飲　漢詩人としての成功を目指す ・秋月（29歳）：父が重病のため帰郷 ・文政十年（30歳）正月、父古処は61歳で世を去った
30－51歳 **二回目の旅** 文政十年 （1827）～	江戸へ向って東遊。 江戸二十年	・豊前（30歳）：兄・白圭に別れを告げ、江戸へ向かう ・東遊の途中、多くの人と交遊（頼山陽・梁川星巌・頼杏坪など） ・**江戸で二十年滞在。『有煒楼日記』** ・房総（32歳）：遊歴。『**東遊漫草**』 ・秋月（51歳）：母の病気のため帰郷　漢詩人としての成功を目指す
59歳－62歳 **三回目の旅** 安政三年～ 安政六年 （1856-1859）	九州各地を遊歴	・豊前（53歳）：亡兄弟を弔う ・筑前山家（54歳）：母と移住。翌年、母が77歳で天年を終える ・肥薩等九州各地（59歳）：遊歴。著『**西遊日歴**』 ・（62歳）：萩で客死　父の詩稿を上梓するため

多く見られる。例えば、『楚辞』の「離騒」に「日月忽其不淹兮、春與秋其代序（日月忽として其れ淹しからず、春と秋と其れ代序す）」という表現があり、また「古詩十九首　其の三」に「人生天地間、忽如遠行客（人生は天地の間、忽も遠行の客の如し）」とあるように、月日の経過の早いことを詠じた作品は数多く見られ、後の各時代の詩作にもしばしば現れている。采蘋の詩に描かれた時間は、彼女が経歴した実際の時間であると同時に、文学表現として用いられた時間でもある。彼女が時間をどのように意識し、どのように表現していたかについて注目することは、采蘋の中に内在する時間意識を掘り出す上で手がかりとなるだろう。

旅とともに時間が過ぎ去る中、彼女の詩に描かれる風景も自ずと移り変わり、時間に対する感覚の変化や客寓意識の形成・深化が顕著にみられる。ここでは、明確な時間表現と文学的時間表現の二種類に分けて考察を行う。

第二節　明確な時間表現

（一）人生の軌跡と思想形成の四段階

まずは、采蘋の詩における明確な時間表現を見ていきたい。旅に託した実生活における実際の時間が記録され、現実に即しているのが特徴的である。こうした作品を通して、采蘋の人生の軌跡と思想形成を明らかにすることが可能である。ここでは、四つの段階に分

けて考察を行う。

采薇の旅に出る前の詩を見ると、時間の表現は極めて少ないことが分かる。

【段階一：旅に出る前】

旅に出る前の詩では、具体的かつ明確な時間の表現はほとんど見られない。この時期、采薇がどのように時間を捉えていたのかについて、二十代前後の「春雨」・「山荘惜花（山荘に花を惜しむ）」という詩例を挙げてみよう。

裊裊行雲起　裊裊として　行雲起り
霏霏微雨斜　霏霏として　微雨斜めなり
……
不知新霽日　知らず　新霽の日
釀得幾枝花　釀し得るは　幾枝の花か　「春雨」

山荘昨夜雨聲雄　山荘　昨夜　雨声雄なり
源上韶光欲作空　源上の韶光　空と作らん
無數飛花依水草　無数の飛花　水草に依り
一群蝴蝶怨春風　一群の蝴蝶　春風を怨む　「山荘惜花」
……

この二首の詩例を見ると、その頃の采薇は周りの物事を細緻に観察しているものの、時間に対する感覚は一般的な「春の到来に対する喜び」・「春の過ぎ去ることに対する感傷的情緒」であり、ありふれたものであったことが見て取れる。その後、旅路に就くとともに、采薇の時間意識は変化していく。

【段階二：旅路の中で　二十代後半～三十歳（父の逝去）】

采薇が最初に、明確に自分の年齢を詩に述べたのは、二十八歳の時、故郷を出た時に詠じた「乙酉正月廿三日発郷（乙酉正月廿三日郷を発す）」という詩である。

夙起拝高堂　夙に起きて高堂に拝し
新年出故郷　新年故郷を出づ
門前手栽柳　門前手づから栽えし柳
殊繫離情長　殊に離情を繫ぎて長し
朝獻后天壽　朝献す后天の寿
使我二尊昌　我が二尊をして昌んならしめん
行人亦安穩　行人も亦安穏ならん
一飲騎鯨觴　一飲鯨に騎るの觴
一飲騎鯨觴　一飲鯨に騎るの觴
此行氣色揚　此の行気色揚がる
唯我二十八　唯だ我二十八

愧亮出南陽　愧づ亮の南陽を出づるに

文政八年（一八二五年）、二十八歳の正月二十三日、采蘋は家族に別れを告げ、単身京都を目指し、故郷を出た。最後の二句「（唯我二十八、愧亮出南陽）（唯だ我二十八、愧づ亮の南陽を出づるに）の「二十八」は、采蘋の当時の実際の年齢である。一人旅を始める前の高揚した意気が見られる。「騎鯨」とは、「騎鯨仙人」・「騎鯨客」・「騎鯨捉月」・「騎鯨李」・「騎鯨詩客」・「鯨仙」などと同じように、李白を意識して典故を踏んで用いたものであると考えられる。(4)ここでは、別れに際して酒を飲む豪放さと、旅への意気込みを表現するのに、李白の故事を用いたのだろう。

「愧亮出南陽（愧づ亮の南陽を出づるに）」も三国時代の英雄である諸葛孔明の故事をふまえ、采蘋が詩人として名声を得ることで、自ら功業を立てようとする決意を示している。諸葛孔明が、劉備の三顧の礼を受けて南陽を出た時の年齢が二十七歳であり、采蘋は、自分はすでに「二十八」になって孔明に後れを取ったことを愧じているが、有能な軍師を自身と比較して考える采蘋は、高遠な志を抱いていたのだろう。最後の二句からは、采蘋が『三国志』などの典故を熟知していることが分かり、彼女が古典の素養を学んで育った様子がうかがい知れる。

采蘋は東游の旅程につき、名を揚げる決心を詩に詠んだ。「二尊昌」、「亦安穩」、「氣色揚」などの表現から、両親ともに健在の彼女は前途に望みを抱き、意気込む様子が見て取れる。

しかし、故郷を出てわずか一年後、父の重病で帰郷した采蘋は、文政十年（三十歳）の正月、父・古処の死を迎えた。采蘋は父の遺言を胸に、江戸での成功を誓ってまた単身旅路に就き、その後、二十年間を江戸で過ごした。その遺言の響きは、父の死後も、幾度も采蘋の心を打った。こうした特徴は、次の第三段階の詩に現れている。

【段階三：旅路の中で～五十代の半ば】

父との約束を負い、四十歳に江戸で作った「新年書懐（新年懐ひを書す）」詩は以下のようにいう。

撞破樓鐘百八聲　撞破す楼鐘　百八の声
還鄉夢斷已天明　還郷の夢断ゆれば　已に天明
清晨照影憐多病　清晨影を照らして　多病を憐れむ
白髮形愁生數莖　白髪愁ひを形りて　数莖を生ず
詩興久因醫藥癈　詩興久しく医薬に因りて廃し
歸心空逐夕陽傾　帰心空しく夕陽を逐ひて傾く
十年孤客遺言在　十年孤客遺言在り
豈敢無名入故城　豈に敢て名無くして故城に入らんや

この詩は天保八年（一八三七年）、采蘋が四十歳頃に、江戸で作っ

たものである。「遺言」とは、文政十年（一八二七年）に父が亡くなる前の遺命「不許無名入故城（名無くして故城に入るを許さず）」である。

この遺言に対する意識は、采蘋の他の詩にも見られる。文政十年、出発の際に「留別佐野贅山」と題した詩にも「除服未多日、再遊遺言縁（服を除して未だ多日ならず、再遊　遺言の縁）という表現が現れている。また、その三年後にも、采蘋は「三年屈指豫期程、幾歳琴書尋舊盟……看取此行吾有誓、無名豈敢入山城（三年　屈指期程を豫し、幾歳か　琴書　舊盟を尋ねん……看取し　此の行　吾誓有り、無名　豈に敢へて山城に入らん）」（「彦助有送別詩次韵留別」）と詠じている。

江戸に来てからすでに十年が過ぎた。故郷を出てから十年目の新年にあたり、采蘋は父の遺言に新たな誓いを立てる。「夢斷」・「照影」・「憐多病」・「白髪形愁」・「詩興癈」等の表現からは、多病の我が身を憐れむ采蘋が、新年を迎える中で感じた孤独さと寂しさが表れている。

最後の二句では、「十年」はある長い時間を広く指す表現として漢詩に多く用いられるが、ここでは、父が世を去って以来、実際に過ぎ去ったちょうど十年の時間をも指している。「十年」という時間には、父を亡くし、孤遊を余儀なくされた采蘋の人生を載せた重みが感じられる。しかし、結句では気分を一転して、往年の父の遺言に対して新たに決意する様子が見られる。

次は、采蘋が五十歳の時に詠んだ「思郷（郷を思ふ）」詩を見ていきたい。

五十親猶健　五十にして 親猶ほ健かにして
餘慶抵萬金　餘慶　萬金に抵たる
豈云千里遠　豈に千里遠しと云はんや
浩浩有歸心　浩浩として　帰心有り

旅も終りに近づき、望郷の念は押えがたく、「浩浩有帰心」という句にその気持ちが詠みこまれている。「千里」の表現もまた、遠くふるさとから離れている采蘋の心情を反映している。故郷に対する旅愁を数字で表わし、時間的表現と空間的表現[5]を併用することによって、心理的な距離を具体化させる効果がある。「千里」の距離・「浩浩たる」望郷の念、詩のスケールの壮大さが感じられる。

采蘋が旅路に就いた後の数十年の中で、直接自身の年齢や、故郷を出て以来の時間について語る表現は、ほかにも数ケ所見られる。例えば、「遠別已經十八年（遠別　已に経て　十八年）」（「留別行方氏[6]」）の「十八年」、「一別不相見、廿年亦已長（一別にして　相ひ見ず、廿年　亦た已に長し）」（「贈鈴木氏」）の「廿年」、「當携几杖客濠田、回首參商三十年[7]（当に几杖を携て濠田に客す、回首すれば參商　三十年）」（「示井上知愚斎」）の「三十年」などの例が挙げられる。これらは、具体的な時間量が詩に書き記され、采蘋の経験し

た境遇が記録されると同時に、詩歌における時間の幅を広める効果もあると言える。次に、十六年前、先父の旧事を追懐する詩「中谷氏招飲。席上次韻主人（中谷氏招飲。席上にて主人に次韻す）」を例として挙げよう。

經歳飄遊西又東　歳を経て飄遊して西又た東
至今郷信杳難通　今に至るまで郷信杳として通じ難し
歸寧夢斷雲山路　帰寧の夢は断たる雲山の路
反哺烏噪日夕風　反哺烏は噪ぐ日夕の風
且喜尋盟逢韻士　且く喜ぶ盟を尋ねて韵士に逢ふを
何知話舊及家翁　何んぞ知らん舊を話りて家翁に及ぶを
回思十六年前事　思ひを回すは十六年前の事
逝者若斯弾指中　逝く者は斯の若く弾指の中

山陽曰：首聯固可。然一正一喩。徴近偏枯
（山陽曰く、首聯固より可し。然れども一正一喩、徴は偏枯に近し）
星巌曰：何偏枯之有。我次爲古人復出[8]
（星巌曰く、何ぞ偏枯有らんや。我次いで古人の復出と爲す）

この詩は、四月七日に中谷真作[9]に招待されて席上主人の詩に次韻したものである。『采蘋詩集』に収録されたこの詩の前に、「此四十餘首係于大家批評故不分古律絶之體也（此の四十餘首は大家の批評に係わり、故に古・律・絶の体を分けず）」と前書きされているように、頼山陽と梁川星巌の批評が挿入されている。おそらく、京都で采蘋が両人に批評を請うた詩作ではないかと思われる。そのため、采蘋の東遊の時期に書いたものと思われる。

西へ行ったり東へ行ったりしている漂泊の身、故郷を離れて長く過ごした。故郷の至親や友人とは音信不通で、また「帰りて寧ろ夢を断たん雲山の路」と見えるように、ふるさとに帰りたくても、旅を続けなければいけないことに心の動揺と嘆息が見える。

「何んぞ知らん舊を話りて家翁に及ぶを（何知話舊及家翁）」のように、話は父のことに及び、十六年前に父が致仕した時のことを思い出す。また、世の中の移り変わりと十六年の光陰と一弾指のような短い時間を並列することによって、長い時間とごく短い時間を比較し、滄桑の変に対する感慨がいっそう明確に表現されている。

この時期のこうした書き方が用いられた詩作を見ると、時間の表現と「歸心」、「歸寧」、「歸」、「歸不得」、「回思」、「回首」、「遠別」、「一別」などの詩語・表現が多く併用されることから、采蘋の中にある帰心意識が反映されていると考えられる。

秋月を離れて、采蘋は自分の旅の出発点としての故郷を語りながら、故郷に対する帰心意識を醸成させていた。これらの詩語からみると、采蘋は明らかに、最初から心伸びやかに永遠に世の中を天遊する思いを持っていたのではなく、いつか必ず故郷に戻る気持ちを抱いて遊歴を続けていたことがうかがい知れよう。

【段階四：五十五歳[10]以降～帰る場所を失い、天涯孤独の悲嘆】

しかし、故郷の秋月では、兄と弟が相次いで世を去り、故郷にいる母のもとへ帰った采蘋は、母への孝養を尽くすも、五十五歳の時、母は七十七歳で世を去り、采蘋は帰れる故郷を喪失し、全く天涯孤独となってしまった。第四段階、采蘋が六十歳の時に詠じた「歳暮感懐用陸放翁韻（歳暮感懐　陸放翁の韻をと用ふ）」詩を見ていこう。

欲梳飛蓬首　飛蓬の首を梳らんと欲し
獨坐明鏡前　獨り坐す　明鏡の前
絲絲難遮老　絲絲　老ひを遮り難し
多愁六十年　愁ひ多し六十年
心事似蒸沙　心事沙を蒸すに似たり
灰死何時然　灰死　何れの時にか然らん
乖違伯氏託　伯氏の託に乖違し
空嗟日月違　空しく嗟く　日月の違るを
……

全詩は十二句である。「飛蓬首」とは、頭は雑草のようにぼさぼさであるようすである。元来『詩経・衛風・伯兮』の「自伯之東、首如飛蓬。豈無膏沐、誰適為容。」（伯の東してより　首　飛蓬の如し　豈に膏沐すること無からんや　誰に適か人としてか容を為さん）により、『毛詩正義』では「首如飛蓬。婦人、夫不在、無容飾」と注する。ここでは、粧飾や化粧に気を使わず、鏡の前に独坐する情景を詠っている。

「明鏡の中に白髪を見る」という表現に関して、松浦友久氏は「題材論・発想論の大勢から見れば明らかに唐詩の類型の一つである」と指摘する[11]。この詩も嘆老の作と見てよいであろう。

そして、詩に用いられた詩語から、采蘋の晩年の宗教に対する関心が見られる。「蒸沙（沙を蒸す）」という表現は、もとは仏教の用語[12]であり、砂を蒸して飯にすることはあり得ないように、成功できないという意味や不可能の意味で用いられる。この詩において、歳暮にあたって六十歳の采蘋は、一体何に対して失望感に満ちた心境を打ち明けているのだろう。すでに世を去った兄弟からの依託や父親の詩稿を上梓する願望、自分の未だ成し遂げていない志、空しく過ぎ去った六十年の人生を振り返えった。ここの「六十年」は現実の状況を描き出すにとどまらず、詩人の内面における意識と感情をも表出し、読者の心を揺り動かしている。

詩の全体から見ると、単なる年を取る「嘆老」ではなく、父の遺命・兄の依託を未だ果たせない失望感、宗教思想への関心等、深みのある時間が記されている。その後、こうした傾向はますます激烈化する。采蘋の「巳未元旦」詩を見ると、

生來六十二回春　生来　六十二回の春

半在頭陀逢歳新　半ば頭陀に在りて　歳の新たなるに逢ふ
搔首踟躕世途険　首を搔き　踟躕す　世途の険
乃知儒佛是同倫　乃ち知る　儒佛は是れ同倫なるを

安政六年（一八五九年）春、采蘋は再び父・古処の詩集出版を期して江戸に向け出郷し、その途上、長州（現在の山口県）萩で十月一日に病死した。

この詩は安政六年、六十二歳の采蘋が迎えた人生の最後の新年に詠んだ詩である。「乃ち知る　儒佛は　是れ同倫なるを」、お互いに反目し合っていても、結局は同じ教えであるという境地に達し、ここに至って、采蘋は、人生の諦観にも似た思いを持つようになってきた。

以上に述べたように、まるで日記を記すように、采蘋は明確な時間表現を詩の中に記し、自分の人生の各段階に記号を付けていた。そうした表現は彼女の人生各段階におけるそれぞれの風景と全体的な歴程を映し出している。

采蘋が旅に出る前の詩を見ると、時間の表現は少ないということに気付く。旅に出ることによって、それまでの穏やかな日常生活とは異なる生き方に変わり、采蘋の時間に対する感覚も旅路に就くこととともに徐々に変化し、より鋭敏な形になってきたのであろう。そして彼女の人生に対する考えも深まったのではないかと考えられる。

また、前期の詩から見ると、過去は采蘋の意識の中に確固とした存在性を持っていることが分かる。常に昔の事を振り返り、思い出し、過去（一人旅に出た時点）に錨を下ろすように自分の現在を確認する。詩の中では、過去はかなりの比重を占め、現在の意識の中で甦ってくる記憶として現れる。采蘋の詩では、永遠の過去に生きている自分の姿が現れ、未来も現在も彼女は持たない。外部の現実の時間を再認する機能がうまく作動せず、昔への追憶は現在の経験より圧倒的に鮮明である。詩人の意識は、ひとつの理念に支えられている。それは、絶え間なく過去と関係を結ぶことで、過去を起点として　今現在までの時間を計ることで現在の自身の立場を確認している。彼女は「旅」が自分の人生にとって、ただならぬ意味を持っていることを自覚していたのではないかと思われる。

過去と現在を調節できずに、方向を失ったままで、前進することができない。旅に出かけながら、決まった住処も持たず、ただただ時間と空間を彷徨っている采蘋像が現れている。

ところが、故郷の秋月では、兄の白圭が文政十一年（一八二八）、弟の瑾次郎が天保三年（一八三二）と相次いで世を去った。故郷に母のもとへ帰った采蘋は母への孝養を尽くし、嘉永五年（一八五二）に母は七十七歳で世を去った。采蘋は身寄りがひとりもなく、ひとりぼっちになってしまった。

采蘋の五十代から六十代にかけて書いた詩では、故郷の喪失・帰る場所がないことによる帰心意識の消滅が見られる。前期の「帰る」

という主題に対して、晩年の詩では比較的、現在に向かうという心境を反映する表現が大きな比重を占めている。

「忽迎四十九年春」、「多愁六十年」、「人間久夢百年中」、「三萬六千日」、「蹉跎過半生」、「半生旅食従吾好」などのように、采蘋は現在にあたって、今までの人生を認めるようになった。そして詩における時間累積を描く表現が増えた。四十九歳の自分、愁いに満ちた六十歳の人生を送った自分、半生を蹉跎して過ごした自分、過去を自分のなかに保存し、現在に至った。今まで生きてきて、実際に経験してきた時間を表現する上述のような詩語は、彼女の記憶のなかに溶け込んできた。世の移り変わりを経てきた実体験により、その人生を語る詩歌が創り出されていく。

その他、采蘋の詩には、伝統の節日を題として詠まれたものも多数存在している。その中でも、特に「元旦」と題した詩作が多い。一年の特定した日にちに詩を詠む儀式を通じて、采蘋の時間の経過に対する感覚は一層鮮明になり、その心境の変化もうかがえる。この点についての分析は、別稿に譲ることにしたい。

次の節では、補足として、客游生活を描写する詩作における「時間」を取り上げて見て行きたい。

（二）「客游」を語る時間表現

前文に述べたように、采蘋はより遥かな過去を振り返って、旅を始めた最初の時点に遡ることについて詠む作品が目立っているが、そのほかに、旅の途中での人々との交遊を題材とした詩では、采蘋は自分を客として滞在地で過ごした時間について語り、比較的に短い時間を詠じる表現も現れている。それは主に彼女の他郷で旅をして滞在していた時間を総括的に描くもので、時には旅の途中で知り合った友人に贈る送別・離別の詩として、自分の未練があって立ち去りがたい様子を友人に述べている。このような詩作からは、采蘋の「旅の詩人」としての一側面がうかがえよう。

采蘋が客游生活を初めて味わった長崎での一年を語った「自崎陽帰途（崎陽自り帰途）」詩を挙げよう。

一年強半崎陽客　一年の強半　崎陽の客
遊倦長風破浪歸　遊倦として　長風　浪を破りて帰る
肥筑連山迎旦送　肥筑の連山旦を迎へて送り
風帆截水送如飛　風帆水を截りて送ること　飛ぶが如し
候潮江口舟膠處　潮を候つ江の口　舟膠の処
入夜篷窓人起稀　夜に入り篷窓に人起くること稀なり
鄉近吾儂欣不寐　郷近く吾儂欣びて寐ず
揚眉先整故園衣　眉を揚げ先ず整ふ　故園の衣

采蘋の滞在が長引くために古処は先に秋月に帰ることとなり、采蘋にとっては始めて親元を離れる一人暮らしの経験であった。帰路の途中で詠んだ詩にはその思いが込められている。この長崎への旅

は、采蘋の漢詩人としての修業の大成功とも言える旅となった。この一年（実際は半年ほど）、采蘋にとっては清客との詩の応酬で得た自信と、長崎・佐賀の詩人たちから良い評判を得たことで、江戸への期待が膨らんでいく。

ほかに、客として異郷の土地で悠遊し、友人と行樂していたようすが描かれている表現も少なくない。例えば、「送劉叔珍大歸分韻」詩に「樂地優遊四五年、詩思駘蕩欲成篇（樂地優遊　四五年、詩思駘蕩として　篇を成せんと欲す）」という詩句があり、采蘋は他郷で過ごした楽しい時間（「四五年」）、そしてそれが自分の文学に与えた影響（「詩思駘蕩」）について語っている。また、「行樂三旬如片夢、清愁萬斛又千頭（行楽三旬　片夢の如く、清愁万斛　又た千頭）」（「別盤谷山人」）とあるように、時間の経過の早さを表現し、別れの際の愁いを具体化させて（萬斛・千頭）描いている。

類似した時間表現は采蘋の詩に数多くあるが[13]、前文に述べたように、多くは送別・離別詩の中に現れている。采蘋が異郷でどのように時間を過ごしたのかを実際に示すと同時に、この旅程を記念し、区切りを付ける意味も含まれているではないかと考えられる。なお、それらの詩は極めて具体的に実際の旅程を反映し、詩人・文人と交わりながら、名所や交遊の場など、常に居場所を変動させていることが分かる。諸所を遍歴して旅に過ごした時間は采蘋の「旅の詩人」としての実態を示している。

また、遊歴の中で、采蘋は一度訪れた土地を再び巡り歩くことが何度もあり、時間を経た今昔の感に心を打たれ、その感慨を詩に記した。

七月既望、望瀛亭書感示主人醉翁。余曽従先人来遊。距今十三年、同月日也。（七月既望、望瀛亭にて感を書して主人酔翁に示す。余曽て先人に従ひて来遊す。今を距たること十三年、同月日なり。）[14]

曽游君記不　曽游の君に記すや不や
此來望瀛州　此に来たって瀛州を望む
離別十餘歲　離別十餘歳
光陰一転頭　光陰一転頭
醉翁老益壯　酔翁老いて益ます壮なり
孤客吟空愁　孤客空愁を吟ず
誰知風馬牛　誰か知らん風馬牛
重逢既望秋　重ねて逢ふ既望の秋

「同月日」とは、采蘋が十八歳の時に初めてここに訪ねたことを指している。七月十六日は奇しくも十三年前の同じ日であり、その時の事を思い、感慨を詠った詩である[15]。ここでは、「離別十餘歳、光陰一転頭」の句から、采蘋は再遊によって、時間の儚さを実感したことが見て取れる。

同様に十数年を経て同じ地に立つことが、「鏡浦」の詩にも詠じ

られた。

十八年來夢一場　十八年來　夢一場
曾臨鏡面照容光　曾て鏡面に臨みて容光を照らす
如今憔悴猶淪落　如今憔悴して猶ほ淪落し
可耐鬢鬆鬢作霜　耐ふ可けんや　鬢鬆鬢霜と作るに

これは、弘化四年（一八四七）、采蘋が五十歳のとき、第二回の房総遊歴にあたっての詩である。鏡浦は、館山湾の雅称である。采蘋の第一回の旅は文政十二年（一八二九）三十二歳のときに行われ、十八年前のことであった。采蘋はかつてここで鏡のような水に顔を映した若かりし頃を懐かしみ、すでに白髪の混じった今の「鬢霜と作る」「憔悴」たる容貌との差を詩に詠じている。

このように、行ったことのある土地にもう一度遊歴に来て、隔世の感を詠む時間表現はほかにも多く挙げられる[16]。それらは主に房総遊あるいは五十代の九州遊歴の期間にあたっての詩作であり、過去に遊歴した土地への追憶や当地の友人に対する思いが込められている。采蘋の人生は次から次へと連続している旅で構成され、昔から長時間を亘って現在に至り、その「物是にして人非なり」の慨嘆と今昔の感が強く感じられる。それはまさに旅が彼女の時間に対する感覚と思索を深化させたことの明証と言えるのではないだろうか。

第三節　文学表現としての時間

采蘋が実際に経歴した時間を記録した明確な時間表現以外に、彼女が意識的に詩に読み込んだ文学表現としての時間も見られる。行旅に対する見方は徐々に変化してくると同時に、表現の仕方も次第に変化に富んでいく。

若い頃から、采蘋は時間に関心を抱いていた。二十五歳の作「秋江夜泊」に以下のようにいう。

爲客天涯歳月過　客と為りて　天涯　歳月過ぐ
孤舟夜泊大江阿　孤舟　夜泊す　大江の阿
……
哀猿嘯起還郷夢　哀猿　嘯き起こす　還郷の夢
不是三聲淚已沱　是れ三声ならずして　涙已に沱なり

この頃、采蘋はまだ一人旅の旅路に就かず、父の古処に随行して九州を遊歴していた。父とともに福岡に遊んだときに作ったこの詩には、若き旅人の月日の流れに対する郷愁の意識の芽生えや、若いうちに、その旅の体験から生じた時間に対する敏感さが見られる。しかし、福岡から秋月までの距離はそれほど大した旅と言えず、この頃の「歳月過ぐ」という表現は、恐らくまだ漢詩の作法に従って

使っているものであり、采蘋の旅と時間に対する感覚は深くないと思われる。

第一節では采蘋の詩における明確な時間名詞について述べたが、采蘋の詩では、時間の背景・景物を通じて明確な時間名詞を使わず、婉曲的に時間を表現することが見られる。例えば、三十一歳に作った「巖嶼」詩では、月の満ち欠けで時間の流れることが暗示されている。

滾滾暮潮涵曲廊　滾滾たる暮潮　曲廊を涵す
緑烟消盡夜初凉　緑烟消え盡きて夜初めて凉し
人如蜃氣樓中坐　人は蜃気楼中に坐するが如く
月自鼇頭山上望　月は鼇頭山上より望む
出国三看滿輪影　国を出で　三たび看る満輪の影
聴猿寸斷九回腸　猿を聴きて寸斷す　九回の腸
恐他阿母懐兒切　恐る他の阿母　児を懐ふこと切なるを
一夕秋風鬢作霜　一夕の秋風に鬢霜と作らん

「滿輪影」は満月の姿を指す。滿輪の影を三たび見るとは三ヶ月を経過したことを言う。漢詩では、「明月を見る」は常に「望郷」の発想につながっている。ここでは、月で時間の流れを表現し、望郷の念を述べている。

六句目は猿の悲しい鳴き声によじれ、ちぎれんばかりの切ない思いを表現している。「聴猿」の語は、杜甫の「秋興 八首」の第二首にある「猿を聴かば実にも出す三声の涙」という句によると考えられる。「寸斷の腸」とは、腸がちぎれちぎれになるほどに辛い思いをすることであり、「九回の腸」とは腸が何重にもねじれるほどもだえ苦しむことである。司馬遷の「報任少卿書」（任少卿に報ずるの書）に「是を以て腸一日に九廻す」という類似した表現がある。(17)七句目は母親が娘のことをしきりに心配し、一晩のうちに、白髪が鬢の中に生え出ることを想像し、旅の経験から生じたより激しい感情を表わす。

また、経過した時間への思いを述べる際に、より広い幅で表現することもある。五十歳に詠んだ「懐人詩屋席上呈主人（懐人詩屋席上にて主人に呈す）」詩を見ると、

三萬六千日　三萬六千日
蹉跎過半生　蹉跎として半生を過ぎ
與君連夜話　君と夜を連ねて話り
慰我暮年情　我が暮年の情を慰む

人生の約百年の軌跡を語った「三萬六千日」は李白「古風　其の二十三」(18)（「古風　其二十三」）詩の「三萬六千日、夜夜當秉燭（三萬六千日、夜夜　当に燭を秉るべし）」の詩句に基づき、一気に詩のスパンを広げ、詩の世界観の壮大さを感じさせる。過ぎ去った年月

を振り返る際に、既成の詩語を用いた例の一つである。

また、経過した時間への思いのほかに、采蘋の未来について語る態度からも、彼女の中にある客寓意識がうかがえる。故郷への帰心意識に対して、不確実な未来の時間に対する不安感が見て取れる。「畳韻和高橋蒼山（畳韻して高橋蒼山に和す）」詩がある。

此去悠悠又向東　此より去りて　悠々として　又東に向かふ
神交千里夢相通　神交　千里　夢に相通ず
家元天末歸何日　家は元より　天末　帰るは何れの日ぞ
跡似楊花飛任風　跡は楊花に似て　飛びて風に任す
……

「帰るは何れの日ぞ」、「跡は楊花に似て　飛びて風に任す」と嘆き、定住せず、漂って流浪し続ける楊花のように、旅人としての漂泊の感覚を表現している。

さらに、下に挙げた友人に送る詩の例では、「不識何年重剪燭　巴山夜雨話離情（識らず　何れの年ぞ　重ねて燭を剪らん、巴山夜雨　離情を話す）」（「同内田深澤二子賦」）、「當今須盡醉、明日或難期（當今須く醉ひを尽くすべし、明日或いは期し難し）」（「三月朔同盤谷主人携殘樽賞山花」）とあるように、将来のある時点を設定して想像し、友人との別れの後の交情への関心を示すが、根無し草のような自分にとっては不確実な未来に対する不安が見て取れる。

以上は、采蘋が好んで詩に多く使っている時間表現をその生涯の歩みに即して見てきた。人生を旅に過ごしていたとともに、彼女の時間の流れに対する意識もより明確な形になってきた。采蘋は意識的に「時間」を文学表現・素材として、様々な手法を試しながら詩に詠み入れ、時間に対する深みのある思索を通して、詩歌に反映される世界を大いに広げた?。

それでは、時間表現の手法について、采蘋の詩を同時代に采蘋と交遊していたほかの詩人と比べてみると、どのような違いがあるだろう。

第四節　交流のある詩人たちとの対比

江戸時代後期を代表する漢詩人頼山陽（一七八〇―一八三二）・梁川星巌（一七八九―一八五八）の二人は互いに交流があり、また彼らを軸に、星巌の妻梁川紅蘭（一八〇四―一八七九）、山陽の女弟子江馬細香（一七八七―一八六一）と原采蘋の交遊関係が成立していた。

采蘋は本来父古処を師としていたが、父の死後は父の詩友である菅茶山（一七四八―一八二七）・頼杏坪（一七五六―一八三四）・梁川星巌・頼山陽等の一流詩人を師とし、詩の添削を頼みながら勉学を続け、様々な影響を受けていた。例えば、『采蘋詩集』の冒頭に

置かれた四十余首の詩には頼山陽・梁川星巌が付けた評点が見られる。[19]

山陽の女弟子細香と采蘋が相まみえることは一度もなかったそうだが、二人は全くの無縁でもない。「余、少琴[20]、采蘋両女史と千里隔絶し、縁りて面話無きを憾むこと久し[21]」と語ったように、同じ師匠に学んでいる采蘋に多大な関心を示している。

采蘋と紅蘭との交遊は文政七年、星巌と紅蘭は九州に入る頃から始まった。福岡で梁川夫婦は亀井昭陽を訪ね、夏の末には長崎に到り、清人江芸閣らと面会して詩を唱酬し、また柳篁池館で彼らと会飲した。この柳篁池館とは、ついこの春まで原采蘋が滞在して名を馳せた[22]ところである。彼女の噂を伝え聞いて、星巌は采蘋に寄せる詩[23]を作っている。このことについて、小谷氏は「紅蘭も彼女の評判に強い刺激を覚えたことであろう[24]」と指摘する。采蘋の詩の中にも「題紅蘭女史畫菊」と題した詩があり、二人の交遊の様子がうかがえる。

江戸後期に活躍したこの三人の女性漢詩人は、生まれる年が近く、実は同じネットワークの線上で結ばれており、互いにそれぞれの師匠を通じて交流の機会があった。しかし、文学創作において各自がそれぞれの特徴を持ち、特に、詩作における時間表現とそれに反映されている時間意識には、大きな相違が見られる。

細香・紅蘭・頼山陽の詩作にも時間を示す表現が見られるが、詩集の中に散在するに過ぎず、用例は非常に少ないことが分かる。詩人別に見て行きたい。

江馬細香の詩に現れた明確な時間表現について、代表的なものとして「懐裡三年雖無愛、四十歳中承顔久[25]（懐裡　三年　愛無しと雖も、四十歳の中　顔を承くること久し）」という例が挙げられる。これは、細香が四十五歳の時、病没した継母を思って作った詩である。継母への深情を託しているが、ここでの時間意識は家族の永眠という突然の出来事に触発されたものである。

また、旅の経験が少ない細香は、室内の空間を背景として、静態的な時間表現を多く詩に描いている。静態的な時間表現とは、明確に時間を指す表現は現れないが、時間の流れは詩に暗示され、詩歌における総体的印象を映し出しているものである。例えば、「冬夜作時有瓶中挿梅花水仙（冬夜作、時に瓶中に梅花水仙を挿せる有り）[26]」詩の「小閣沈沈靜夜長、微明燈影照書牀（小閣　沈沈として靜夜　長く、微かに明るく　灯影　書牀を照らす）」という句に、静かな冬の夜は長く、灯が机の上をほのかに照らしている光景が描かれており、時間の流れから切り取られた一つの断片のような印象を与える。そして「冬夜」詩に「人靜寒閨月転廊、了來書課漏聲長（人静まりて寒閨　月　廊に転ず、了來　書課　漏聲長し）」とあるように、一晩中月の移動を通じて時間の経過を暗示するが、長い闇夜の静かな環境の中で、時間は普通より遅く感じるように表現されている。そして「夏夜」詩に「細酌待人人不到、一織風脚素馨香（細酌人を待つも　人到らず、一織の風脚　素馨香し）」という表現がある。

少し酒を傾けながら、人を待っている。そのうちに、そよ風がジャズミンの香りを運んでくる。ここの時間もある動作（人を待つ・酒を飲む）を行ううちに展開されたもので、周囲の雰囲気の描写によってより明確に浮き立たせられている。以上に挙げた詩例のように、細香は「一晩中」・「人を待つ」・「花を見つめる」等の短い時間の経過にクローズ・アップした静態的時間を好んで用いている。それに対して、前文で述べたように、采蘋は空間を飛び越えた動態的時間表現を多用し、鋭くかつ深い時間に対する感覚を持っている。

ところで、細香の六十代の詩作には「六十年」という表現が何箇所か見られる。例えば、「偶作」[27]詩に、「弄月嘲花六十年、老來情態更堪憐（月を弄び　花に嘲れ　六十年、老來　情態　更に憐むに堪えたり）」とあり、月と花を賞美して楽しんで過ごしてきた六十年を語っている。そして「題自画（自画に題す）」詩[28]に、「六十年間筆、寫君千萬竿（六十年間の筆、君を写すこと　千万竿）」とあるように、絵を描きはじめて六十年間、竹を描き続けて千万本も写したことを述べた。ここの「六十年」は無論人生の実体験に基づき、老いたことを歎き、あるいは過ぎ去った人生を顧みる表現として用いられているが、普通の紀年表現と大きな差はなく、旧来の「嘆老」詩の枠からはみでることはない。

次に、夫の星巌に随行して旅行した経験のある梁川紅蘭の詩を見てみると、旅の途中に襲ってくる客愁を詠む表現が若干現れている。例として、「旅懐」詩に「流光與客共匆匆、秋老羈懐慘澹中（流光　客と共に匆匆、秋老いて　羈懐　慘澹の中）」（「旅懐二首」[29]其の二）という表現がある。時も旅をする人も、旅であわただしく通り過ぎていく。秋は深まってしまい、旅人の心は郷愁で痛んでいる。「流光　客と共に匆匆」から、旅と時間の関連性がうかがえるが、観念的・画一的な使い方に過ぎない。

最後に、采蘋に漢詩の指導を与えたことのある頼山陽の詩を見て行きたい。山陽は多く旅に出ていた詩人として名を知られているが、詩における時間表現は多くない。その中でも、主に母との関連で詠じた詩作が見られる。数例を挙げてみよう。

不同此夜十三回　此の夜を同にせざること　十三回
重得秋風奉一巵　重ねて得たり　秋風　一巵を奉ずるを
「中秋無月侍母」[30]

京城迎母半年留　京城　母を迎えて　半年留む
月白風清何処遊　月白く　風清し　何れの処にか遊ばん
「絶句二首」其の一

五十児有七十母　五十の児　七十の母有り
此福人間得応難　此の福　人間得ること応に難かるべし
「送母路上短歌」

白頭母子重來詣　白頭　母子　重ねて來りて詣でる
存没茫茫五十年　存没　茫茫　五十年
「奉母遊巌島聞余生甫二歳二親挈之省大父遂詣此」

以上に挙げた詩例から、山陽が母との旅を描き、旅路で母を視線の中心とし、また母に対する眷恋・父に対する追憶を軸として展開した時間表現が見られる。

諸詩人との対比について、要点は以下のようにまとめられよう。まず、同時代の詩人において、采蘋は時間表現を最も多く詩に用いていることが分かる。特に他の女性詩人に比べると、一般的な女性詩人は花鳥風月を好んで詩作に詠むが、彼女らによる詩歌の内部における時間の組み立ては、花びらが風に吹かれて落ちたり、鳥が鳴き声を出したりしているしばらくの間につづく断片的の時間にすぎないため、詩歌のスケールは狭い感じを与える。これに対し旅の経験が刺激をもたらしたためか、采蘋の時間の経過に対する敏感さは、遥かに「春を傷む・老いを嘆く」などの一般論的な漢詩類型を超越し、旅の実体験から生じたより切実な感情を詩に詠み、時間の経過そのものを取り入れることによって、詩の世界が大いに広げられた。

さらに、他の詩人と比べると、原采蘋は「時間」を自分の慣用的な題材として取り上げ、偶発的な事件に触発されるのではなく、自覚的に旅・家族・故郷・交遊等、人生における時間に密接に係わっている様々な経験を題材として取り入れ、采蘋独自の時間に対する感受性が見て取れる。

まとめ

江戸期の漢詩人のうち、漢詩人としての成功を目指した原采蘋は、幾度も江戸へ向かい、一生旅をした。自身の放浪生涯と感慨は漢詩の世界に描かれ、変動しつつある風景、旅の途中での人々との出会いと別離など、遊歴の経験から新しい刺激を受け、彼女の内面にある時間に対する意識を熟成させた。本稿では、采蘋が好んで詩に多く使っている時間の表現を見てきた。その特徴は以下の要点にまとめることができる。

原采蘋の詩作においては、時間に関する表現が格別に多く、一七〇余ヶ所に見える。それは彼女の旅の実体験と深く関わっていると思われる。

采蘋の旅に出る前の詩では、時間の表現が少なく、その後、旅に出ることによって、それまでの穏やかな日常生活とは異なる生き方に変わり、采蘋の時間に対する感覚も旅路に就くとともに徐々に深化し、より鋭敏な形になってきて、彼女の人生に対する思いも深まり、人生を語る姿勢の変化がうかがえる。帰心意識とその消滅・故郷の喪失という主題から見ると、旅に過ごした時間は采蘋の思想形成にとって不可欠な要素であると考えられる。

また、漢詩創作の面において、采蘋にとって「時間」は重要な素

材である。自分の年齢・故郷を出て以来の時間等を詩に書き記し、人生の境遇を記録すると同時に、自分の「焦慮」と「楽遊」の混同した時間を慣用的題材として漢詩に詠んだ。

最後に、同時代の諸詩人、特に女性詩人と比べると、采蘋の詩における時間表現は非常に特徴的で、多くしかも意識的に用いられている。時間の経過を取り入れることによって、十年・数十年のスパンが詩の世界を飛躍的に広げている。そのため、原采蘋の詩は他の詩人の詩と異質なるものとして、壮大なスケール感を生み出している。実際に、江戸のみならず、中国清代・朝鮮の女性詩人の作品と比べても、その時間表現の多用は際立っており、采蘋文学の独自性を形成する部分であると言える。

注

（1）文政八年（一八二五）、采蘋が江戸を目指して出郷した時、古処は餞別の詩句「不許無名入故城」を采蘋に贈り、娘に対する大きな嘱望が込めた。春山育次郎『原采蘋伝』（増訂版、二〇一三年）一三〇頁を参照。旧版は春山育次郎『日本唯一の閨秀詩人原采蘋』原采蘋先生顕彰会編、一九五八年。元来、読売新聞に大正二年（一九一三年）十月より翌年三月まで連載されたものである。

（2）秋月の西念寺にある采蘋の墓に「雌而不伏、千里独行、秀句日出、山移水迎、茫々天下、誰走弋者」の墓誌が刻まれている。

（3）関儀一郎が編集した『采蘋詩集』（『日本儒林叢書』巻十三　東洋図書刊行会昭和二年―十三年刊複製）には、采蘋の詩作のうちの四百四十首が収められている。作品は詩体別に収録され、最後に十編の文章が収められている。他のテキストと異なっている若干の箇所と誤りが見られるが、今までの詩集において、収録された詩歌作品が最も多く、采蘋の詩風と作品の特徴を解明するため、非常に重要であると言えるので、本論文ではこの『采蘋詩集』を底本としながら、『原采蘋詩集』（慶応大学斯道文庫蔵　稿本　戸原継明写）と小谷喜久江「遊歴の漢詩人原采蘋の生涯と詩―孝と自我の狭間で―」（日本大学大学院総合社会情報研究科平成二十五年博士論文）による翻刻したもの等を参考資料として使う。

（4）「騎鯨」は鯨に乗るという意味で、「騎鯨魚」「騎長鯨」ともいう。杜甫の「送孔巣父謝病帰游江東兼呈李白」には、「幾歳寄我空中書、南尋禹穴見李白」の句があり、清の仇兆鰲は「南尋句、一作若逢李白騎鯨魚。按騎鯨魚、出『羽獵賦』。俗傳太白醉騎鯨魚、溺死潯陽、皆緣此句而附會之耳。」と註釈している。後「騎鯨」はよく李白を詠じる典故として使われている。（清）仇兆鰲注『杜詩詳注』（中華書局、一九七九年）を参照。

（5）「弘化五年元旦」詩に、「豈不懷歸有老親、廿年思夢故園春。三千里外魂愈遠、猶作東隅觀國賓。」とあるように、類似した時間と空間の距離を併置する用法が見られる。

（6）全詩は以下の通りである。「遠別已經十八年、相看悲喜涙潸然。暫留明日還征路、離恨茫茫水接天」。

（7）全詩は以下の通りである。「當携几杖客濠田、回首參商三十年。豈料白頭歸養日、重償前債得吟聯」。

（8）『采蘋詩集』では、この詩の後に頼山陽と梁川星巌の批評が書いてある。

（9）小谷氏「遊歴の漢詩人原采蘋の生涯と詩―孝と自我の狭間で―」一一一頁によると、詩における中谷氏は中谷真作というものであり、四月七日に采蘋は中谷真作に招かれ、招飲の席上詩を賦した。

（10）故郷の秋月では兄の白圭が文政十一年（一八二八）、弟の瑾次郎が天保三年（一八三二）に世を去った。采蘋は一人きりと成った母を江戸に呼び寄せようと再三藩に上書したが許されなかった。嘉永五年（一八五二）に母は七十七歳で世を去った。五十五歳の采蘋は天涯孤独となった。

(11) 松浦友久『詩語の諸相―唐詩ノート』（研文出版、一九九五年）二七五頁。

(12) 「如蒸沙石欲成其飯、經百千劫、只名熱沙、何以故？此非飯本石沙成故。」（般刺蜜諦訳、彌伽釋迦訳語、房融筆受『大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經』巻六、金陵刻經處經書）。

(13) 「三年屈指豫期程、幾歲琴書尋舊盟」（「彦助有送別詩次韵留別」）、「唱和三旬重歲醉、東西明日負春之」（「別木東海」）、「丈夫三日目堪刮、況復遐期半十年」（「別藤田孟礪」）、「過了一年成底事、勝興屢停得意地」（「真野翁」）、「江上鴛鴦兩兩遊、征帆一別已三秋、」（「竹枝曲」）等の例が挙げられる。

(14) 原田十兵衛は自らを酔翁と称する。望瀛亭とは彼が持っている別荘の名である。

(15) 小谷氏の論文に、采蘋がこの詩の後に付した日記を翻刻したものがあり、「文化乙亥（十二年）七月十六日予先人に陪して望瀛亭に遊ぶ。主人原田翁は高陽の徒なり。自称酔翁、今茲に予将に東遊せんとす。江都にて便りして道ふ、重ねて酔翁を訪ぬ。酔翁年古稀方に過ぐ。一たび鯨飲すること舊に依りたり。余其の矍鑠として衰へざるを喜びて、聊か一篇を賦して以て宥と為し、且懐舊の情を申るに云う」とある、九十五頁。

(16) 他に、「十五年前君記不、此夕此鄉著夢鶴」（「丁亥十月望泛舟有感次韵杏坪先生」）、「屈指曾遊十九年、也知離合有因」（「重宿海發山自性院」）「去年今日帝王州、佳辰悵然暝萍浮」（「三日和村大有」）等の表現もある。

(17) 福島理子『江戸漢詩選第三巻「女流」』（岩波書店、一九九五年）一六三頁。

(18) （清）王琦注『李太白全集』巻二（中華書局、一九七七年）一一九頁。

(19) 『采蘋詩集』の冒頭に、「此四十餘首係于大家批評。故不分古律絶之體也」（此の四十餘首大家の批評に係わり、故に古、律、絶の體を分けず）とある。

(20) 亀井少琴（一七九八―一八五七）は詩人・画家であり、采蘋と同年である。福岡の儒学者亀井昭陽の長女として生まれ、祖父は亀井南冥である。

(21) 福島理子『江戸漢詩選第三巻「女流」』（岩波書店、一九九五年）三二八頁。

(22) 文政六年（一八二三）の長崎行、父よりむしろ采蘋の方が主となって詩書を講じた。その時の采蘋の意気軒昂たる心情は、「長崎にて感を書す」の作にもうかがえる。

(23) 『星巌集』乙集巻二、西征集二所収。

(24) 小谷氏「遊歴の漢詩人原采蘋の生涯と詩―孝と自我の狭間で―」三三一頁。

(25) 細香と継母の深い情について、門玲子は「生母の顔を全く覚えていない細香や植子にとって、さのはかけがえのない母であった。さののおかげで二人とも生母を喪った淋しさをしらずにすんだ……そのことに二人とも血の繋り以上の深い絆を感じていた」と指摘する。『江馬細香　化政期の女流詩人』（藤原書店、二〇一〇年）二五五頁。

(26) 江馬細香　門玲子訳注『湘夢遺稿』上巻（汲古書院、一九九四年）。

(27) 江馬細香　門玲子訳注『湘夢遺稿』下巻（汲古書院、一九九四年）。下の「題自画」詩同。

(28) 嘉永五年、細香六十六歳の作。

(29) 梁川紅蘭『紅蘭小集』巻一（賓漢閣、天保十二年）。紅蘭二十六歳の作。

(30) 文政七年（一八二四）、山陽が四十五歳のときの詩。